

促成ピーマンにおけるつり下げ誘引栽培技術の確立

(第1報) 誘引法の違いが生育および収量に及ぼす影響

○力武 弘・深田直彦\*・藺牟田真作・黒木利美・渡司照久 (宮崎総農試, \*宮崎県東京事務所)

Establishment of 'Turisage' cultivation technique of forcing culture in sweet pepper

1. Training method on growth and yield

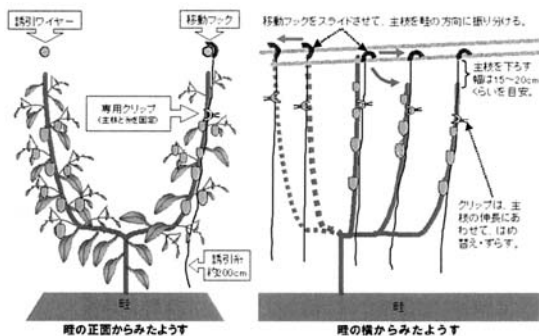
RIKITAKE, H., N. FUKADA, S. IMUTA, T. KUROGI and T. WATASHI

[目的] 促成ピーマンは、販売単価の高い1~2月に収量が低下しやすく、長期作型での多収技術が必ずしも経営的に有利にはならない。これまでに、宮崎総農試ではカラーピーマンにおいて、軒高の制約を受けずに主枝を長期にわたり伸長させる『つり下げ誘引』を考案し、収量面では一定の成果を得るに至った。そこで、促成ピーマンにおける誘引法の違いが生育および収量に及ぼす影響を検討した。

[材料および方法] 品種は、'みやざきグリーン'を用い、2007年8月1日に播種を行い、9月6日に定植した。栽植密度は、畦幅180cm、株間50cmの主枝4本仕立てとし、a当たり111株とした。誘引法として、つり下げ誘引は主枝を誘引線の上端部に到達するまでほぼ垂直に誘引を行い、主枝を畦方向に振り分けて斜めに誘引した(第1図)。側枝は、2,3節で摘心し、収穫後、適宜切り返した。播種105日後につり下げ誘引では主枝誘引を始めた。慣行は県栽培指針に基づいた慣行の摘心栽培を行い、播種120日後(11月29日)に主枝の摘心を行った。栽培管理は両区共通で、N7.6, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>4.0, K<sub>2</sub>O9.7(kg/a)を施用した。収穫は2007年10月1日から2008年5月30日まで行った。

[結果および考察] 播種100日後の誘引方法の違いによる主枝の生育には差はなかったが、播種120日後にはつり下げ誘引で主枝節数、主枝長が大きかった(第1表)。月別の可販果収量は1月以降でつり下げ誘引が摘心栽培より多く推移し、5月末で9%増収した(第2表)。時期別の可販果収量の推移をみると、摘心栽培、つり下げ誘引ともに、収穫の山・谷を示す時期はほぼ同様であるが、摘心栽培は2月以降の谷の時期が長かった(第2図)。

以上のことから、促成ピーマンにおいてつり下げ栽培を導入すれば、常に主枝と側枝の着果部位を確保することができ、販売単価の高い1~2月に摘心栽培よりも増収が見込まれる。



第1表 誘引法の違いが促成栽培ピーマンの生育に及ぼす影響<sup>z</sup>

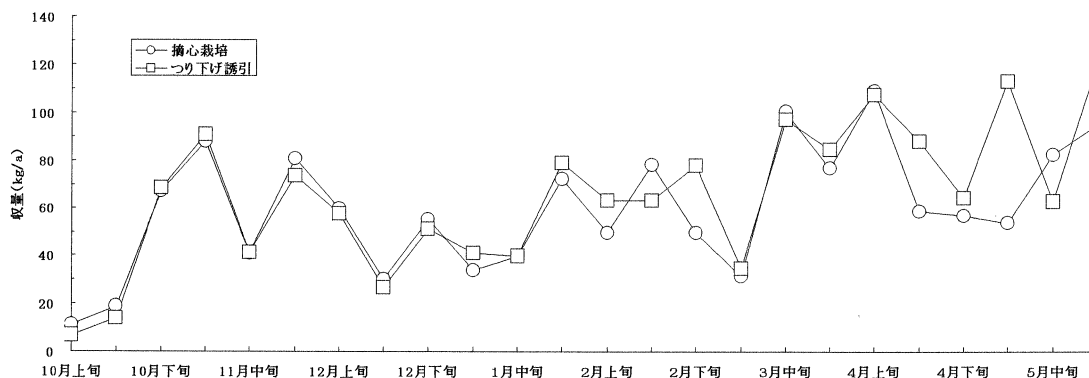
|        | 播種100日後 |             | 播種120日後 |             |
|--------|---------|-------------|---------|-------------|
|        | 主枝節数    | 主枝長<br>(cm) | 主枝節数    | 主枝長<br>(cm) |
| 摘心栽培   | 18      | 117.5±2.5   | 20      | 146.6±2.1   |
| つり下げ誘引 | 18      | 122.8±1.9   | 21      | 153.3±2.3   |
|        | n. s.   | n. s.       | **      | *           |

z: 数値は平均値±SE. Mann-WhitneyのU検定により\*\*は1%, \*は5%未満の危険率で有意差があり, n. s. は有意差がない。

第1図 宮崎農試方式のつり下げ誘引栽培の概略

第2表 月別可販果収量(kg/a)

|        | 10月 | 11月 | 12月 | 1月  | 2月  | 3月  | 4月  | 5月  | 計    | 比   |
|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| 摘心栽培   | 97  | 210 | 145 | 146 | 177 | 208 | 224 | 230 | 1437 | 100 |
| つり下げ誘引 | 89  | 206 | 135 | 159 | 204 | 216 | 259 | 296 | 1564 | 109 |



第2図 旬別可販果収量の推移